

確率・統計 A

若木宏文

wakaki@math.sci.hiroshima-u.ac.jp

<http://home.hiroshima-u.ac.jp/wakaki/lecture/index.shtml>

2014.5.26

目次

確率変数と分布

離散型・連続型分布

多次元の場合

2.5. 離散型・連続型分布

2.5.2. 2次元の場合

2次元離散型分布と連続型分布

2次元確率変数 (X, Y) の取り得る値の集合 D が, \mathbb{R}^2 の高々可算集合であるとき, (X, Y) は **離散型**確率変数, また, (X, Y) の分布を **離散型分布**という.

離散型分布は, 確率関数

$$f(x, y) = P(X = x, Y = y), (x, y) \in \mathbb{R}^2$$

によって決定される.

2次元確率変数 (X, Y) 分布関数が

$$F(x, y) = \int_{-\infty}^x \int_{-\infty}^y f(s, t) ds dt$$

と表されるとき, (X, Y) は **連続型**確率変数, また, (X, Y) の分布を **連続型分布**という.

$f(x, y)$ を (X, Y) または, (X, Y) の分布の**確率密度関数**という.

2次元確率関数と確率密度関数の性質

- 確率関数 (離散型)

X の取り得る値を x_1, x_2, \dots ,

Y の取り得る値を y_1, y_2, \dots とすると

$$(1) f(x_i, y_j) \geq 0, \quad i, j = 1, 2, \dots$$

$$(2) \sum_{i=1}^{\infty} \sum_{j=1}^{\infty} f(x_i, y_j) = 1$$

$$\text{同時分布関数: } F(x, y) = \sum_{x_i \leq x} \sum_{y_j \leq y} f(x_i, y_j)$$

- 確率密度関数 (連続型)

$$(1) f(x, y) \geq 0, \quad \forall (x, y) \in \mathbb{R}^2$$

$$(2) \int_{-\infty}^{\infty} \int_{-\infty}^{\infty} f(x, y) dx dy = 1$$

$$\text{同時分布関数: } F(x, y) = \int_{-\infty}^x \int_{-\infty}^y f(s, t) ds dt$$

$$\left(\frac{\partial^2}{\partial x \partial y} F(x, y) = f(x, y) \right)$$

3項分布

1回の試行で事象 A, B, C のいずれかが起こりうる。
 A が起こる確率を p_1 , B が起こる確率を p_2 とする。
事象 C が起こる確率は, $1 - p_1 - p_2$ である。

n 回の独立な試行で, A が起こる回数を X , B が起こる回数を Y とすれば

$$\begin{aligned} f(x, y) &= P(X = x, Y = y) \\ &= \frac{n!}{x!y!(n-x-y)!} p_1^x p_2^y (1-p_1-p_2)^{n-x-y} \\ &\quad ((x, y) \in D; 0 \leq p_1, 0 \leq p_2, p_1 + p_2 \leq 1) \end{aligned}$$

ただし, $D = \{(x, y); x, y \text{ は非負整数}, x + y \leq n\}$.
このような分布を, パラメータ $n, (p_1, p_2)$ をもつ **3項分布** といい,
 $M_3(n, (p_1, p_2))$ と表す。

2次元正規分布

(X, Y) の確率密度関数が

$$f(x, y) = \frac{1}{2\pi\sigma_1\sigma_2\sqrt{1-\rho^2}} \exp \left[-\frac{1}{2(1-\rho^2)} \left\{ \left(\frac{x-\mu_1}{\sigma_1} \right)^2 - 2\rho \left(\frac{x-\mu_1}{\sigma_1} \right) \left(\frac{y-\mu_2}{\sigma_2} \right) + \left(\frac{y-\mu_2}{\sigma_2} \right)^2 \right\} \right]$$

$$\mu_1, \mu_2 \in \mathbb{R}, \sigma_1^2 > 0, \sigma_2^2 > 0, -1 < \rho < 1$$

で表されるとき、**2次元正規分布**という。

$$\mathbf{x} = \begin{pmatrix} x \\ y \end{pmatrix}, \quad \boldsymbol{\mu} = \begin{pmatrix} \mu_1 \\ \mu_2 \end{pmatrix}, \quad \Sigma = \begin{pmatrix} \sigma_1^2 & \rho\sigma_1\sigma_2 \\ \rho\sigma_1\sigma_2 & \sigma_2^2 \end{pmatrix}$$

とおくと

$$f(x, y) = (2\pi)^{-1} |\Sigma|^{-1/2} \exp \left\{ -\frac{1}{2} (\mathbf{x} - \boldsymbol{\mu})' \Sigma^{-1} (\mathbf{x} - \boldsymbol{\mu}) \right\}$$

と表せるので、 (X, Y) の分布を $N_2(\boldsymbol{\mu}, \Sigma)$ と表す。

周辺分布

- (X, Y) が離散型で、その確率関数を $f(x_i, y_j)$, $i, j = 1, 2, \dots$ とすると、 X は離散型で、その確率関数は

$$f_X(x_i) = P(X = x_i, Y \in D_y) = \sum_{y_j \in D_y} f(x_i, y_j), \quad D_y = \{y_1, y_2, \dots\}$$

- (X, Y) が連続型で、その分布関数を $F(x, y)$, 確率密度関数を $f(x, y)$ とすると、 X は連続型で、その確率密度関数は

$$F(x, \infty) = \int_{-\infty}^x \left\{ \int_{-\infty}^{\infty} f(s, t) dt \right\} ds \quad \text{より} \quad f_X(x) = \int_{-\infty}^{\infty} f(x, t) dt$$

定理 2.10

- (1) (X, Y) が 3 項分布 $M_3(n, (p_1, p_2))$ に従うとする。このとき、 X, Y はそれぞれ 2 項分布 $B(n, p_1), B(n, p_2)$ に従う。
- (2) (X, Y) が 2 次元正規分布 $N_2(\boldsymbol{\mu}, \Sigma)$ に従うとする。このとき、 X, Y はそれぞれ正規分布 $N(\mu_1, \sigma_1^2), N(\mu_2, \sigma_2^2)$ に従う。

(証明は板書で)

定理 2.11

(X, Y) は離散型あるいは連続型.

$f_{X,Y}(x, y)$: 同時確率密度関数

$f_X(x), f_Y(y)$: および周辺確率密度関数

$\Rightarrow X$ と Y が独立であることと

$$f_{X,Y}(x, y) = f_X(x)f_Y(y), \quad (x, y) \in D = \{(x, y); f_{X,Y}(x, y) > 0\}$$

が成り立つことは同値である.

(証明は板書で)

2.5.3. 多次元の場合

多次元離散型分布と連続型分布

k 次元確率変数 $\mathbf{X} = (X_1, \dots, X_k)'$ の取り得る値の集合 D が, \mathbb{R}^k の高々可算集合であるとき, \mathbf{X} は **離散型確率変数**, また, \mathbf{X} の分布を **離散型分布** という.

離散型分布は, 確率関数

$$f(\mathbf{x}) = f(x_1, \dots, x_k) = P(X_1 = x_1, \dots, X_k = x_k), \quad \mathbf{x} \in \mathbb{R}^k$$

によって決定される.

k 次元確率変数 $(X_1, \dots, X_k)'$ 分布関数が

$$F(x_1, \dots, x_k) = \int_{-\infty}^{x_1} \cdots \int_{-\infty}^{x_k} f(s_1, \dots, s_k) ds_1 \cdots ds_k$$

と表されるとき, $\mathbf{X} = (X_1, \dots, X_k)'$ は **連続型確率変数**, また, \mathbf{X} の分布を **連続型分布** という.

$f(x_1, \dots, x_k)$ を \mathbf{X} または, \mathbf{X} の分布の **確率密度関数** という.

多次元確率関数と確率密度関数の性質

- 確率関数 (離散型)

X_i ($i = 1, \dots, k$) の取り得る値を x_{i1}, x_{i2}, \dots とすると

$$(1) f(x_{1j_1}, \dots, x_{kj_k}) \geq 0, \quad j_i = 1, 2, \dots \quad (i = 1, \dots, k)$$

$$(2) \sum_{j_1=1}^{\infty} \cdots \sum_{j_k=1}^{\infty} f(x_{1j_1}, \dots, x_{kj_k}) = 1$$

$$\text{同時分布関数: } F(z_1, \dots, z_k) = \sum_{x_{1j_1} \leq z_1} \cdots \sum_{x_{kj_k} \leq z_k} f(x_{1j_1}, \dots, x_{kj_k})$$

- 確率密度関数 (連続型)

$$(1) f(x_1, \dots, x_k) \geq 0, \quad \forall (x_1, \dots, x_k) \in \mathbb{R}^k$$

$$(2) \int_{-\infty}^{\infty} \cdots \int_{-\infty}^{\infty} f(x_1, \dots, x_k) dx_1 \cdots dx_k = 1$$

同時分布関数:

$$F(x_1, \dots, x_k) = \int_{-\infty}^{x_1} \cdots \int_{-\infty}^{x_k} f(s_1, \dots, s_k) ds_1 \cdots ds_k$$

$$\left(\frac{\partial^k}{\partial x_1 \cdots \partial x_k} F(x_1, \dots, x_k) = f(x_1, \dots, x_k) \right)$$

多項分布

1 回の試行で事象 A_1, \dots, A_{k+1} のいずれかが起こりうる。

A_j が起こる確率を p_j ($j = 1, \dots, k$)

事象 A_{k+1} が起こる確率は, $p_{k+1} = 1 - (p_1 + \dots + p_k)$ である。

n 回の独立な試行で, A_j が起こる回数を X_j ($j = 1, \dots, k$) とすれば

$$\begin{aligned} f(x_1, \dots, x_k) &= P(X_1 = x_1, \dots, X_k = x_k) \\ &= \frac{n!}{x_1! \cdots x_k! x_{k+1}!} p_1^{x_1} \cdots p_{k+1}^{x_{k+1}} \quad (x_{k+1} = n - (x_1 + \dots + x_k)) \\ &\quad ((x_1, \dots, x_k) \in D; 0 \leq p_j \ (j = 1, \dots, k); p_1 + \dots + p_k \leq 1) \end{aligned}$$

ただし,

$D = \{(x_1, \dots, x_k); x_j \text{ は非負整数 } (j = 1, \dots, k), x_1 + \dots + x_k \leq n\}$.

このような分布を, パラメータ $n, (p_1, \dots, p_k)$ をもつ **($k+1$) 項分布** とい
い, $M_{k+1}(n, (p_1, \dots, p_k))$ と表す。

多変量正規分布

$(X_1, \dots, X_k)'$ の確率密度関数が

$$f(x_1, \dots, x_k) = (2\pi)^{-k/2} |\Sigma|^{-1/2} \exp \left\{ -\frac{1}{2} (\mathbf{x} - \boldsymbol{\mu})' \Sigma^{-1} (\mathbf{x} - \boldsymbol{\mu}) \right\}$$

と表せるとき, k 次元正規分布に従うという. ここで

$$\mathbf{x} = \begin{pmatrix} x_1 \\ \vdots \\ x_k \end{pmatrix}, \quad \boldsymbol{\mu} = \begin{pmatrix} \mu_1 \\ \vdots \\ \mu_k \end{pmatrix}, \quad \Sigma = \begin{pmatrix} \sigma_{11} & \cdots & \sigma_{1k} \\ \vdots & \ddots & \vdots \\ \sigma_{k1} & \cdots & \sigma_{kk} \end{pmatrix}.$$

パラメータ $\boldsymbol{\mu}$ は任意の定数, すなわち, $-\infty < \mu_i < \infty$ ($i = 1, \dots, k$) で, Σ は正定値行列である.

定理 2.12

$(X_1, \dots, X_k)'$ は離散型あるいは連続型.

$X_i, i = 1, \dots, k$ の周辺確率密度関数を $f_i(x_i)$,

同時確率密度関数を $f(x_1, \dots, x_k)$ とする.

このとき, X_1, \dots, X_k が独立であることと, 任意の

$(x_1, \dots, x_k)' \in \{(x_1, \dots, x_k)'; f(x_1, \dots, x_k) > 0\}$ に対して

$$f(x_1, \dots, x_k) = f_1(x_1) \cdots f_k(x_k)$$

が成り立つことは同値である.